

研修機関	ふるさと振興公社クアハウス九谷
研修期間	平成20年10月 1日～10月31日
所属・氏名	能美市立根上中学校・谷井 博文

I 研修目的

本県の将来を担う心豊かで創造力あふれる児童生徒を育成するため、教員自らが教育観や指導感を見つめ直し、急激な社会の変化に適切に対応できるよう、その資質を向上する。

II 研修内容

1 温泉・プール施設業務研修

- ①残留塩素・温度測定→室内プール・各種温泉・室外プール
- ②館内巡回→ロッカールーム・更衣室・トイレ
- ③リネン類の準備→バスタオルたたみ・フェイスタオル整理
- ④客用消耗品・リネン類管理→クシ洗い、スイミングキャップ洗い
- ⑤ロッカールーム整理→洗面台拭き、床掃除・リネン袋交換
- ⑥ボイラールーム見学・学習→温泉循環の仕組みや終了の仕方の説明
- ⑦警備→駐車場巡回・ゴミ拾い
- ⑧開館・閉館作業→プールサイド清掃・風呂場等水抜き
- ⑨休館日作業→清掃（露天風呂・空調フィルター・ヘアーキャッチャー・プール）

2 トレーニング施設業務研修

- ①トレーニングルーム清掃
- ②トレーニング利用者受付→記録用紙準備・使用者数記録
- ③冷水器管理→冷水補充、コップ洗い
- ④各種セミナー体験・見学
 - ・「シルバー健康教室」体験（根上社会福祉センター）
 - ・「お達者セミナー」体験（和田山荘）
 - ・「らくらく整体」体験（クアハウス九谷）
 - ・「キッズダンス教室」見学
 - ・各種「健康教室」見学

3 フロント業務研修

- ①1階フロアー・脱衣所・トイレ清掃
- ②入退館受付

III 研修成果

「健康促進及び安全管理」と「地域の人とのふれあい及び接し方」を研修テーマと考え、「民間企業等派遣研修」に臨んだ。

最初に担当した「業務」では、温泉施設やプールでの更衣室やロッカールーム、男子トイレの環境保全を中心とした仕事であった。

詳しい作業内容は、お客様の使用済みのタオルや衣類をまとめたり、使用済みの櫛やスイミングキャップの洗浄、プールや温泉の残留塩素の検査、ロッカールームや脱衣所の床や洗面所の清掃、夜間の駐車場巡回など様々なもので、勤務時間中は常に館内外を動き回らなければならなかった。

しかし、この「業務」を通して、いかにお客様が施設内で快適に過ごしていただけるかを自分自身で深く考え、お客様の様子を観察し、こうすれば良いのではないかと判断して行動できるようになり、お客様から「いつもまめに清潔にしてもらって、気持ちよく使えるよ。」

本当にありがとう」という言葉をいただいた時は、自分の思いが通じた気がして、この仕事の充実感や達成感を味わえた。

教育現場においても、日頃の学習指導や生活指導の中で教師側の思いをどう生徒に伝えるのかをよく考え、生徒の様子をよく観察し、きめ細やかな行動に移す努力の必要性を強く感じた。

次に担当した「トレーニングルーム」では、トレーニングルーム内の設備管理や、お客様に対しての受付が主な仕事で「業務」とは正反対の「待つこと」が中心の内容であった。

この「トレーニングルーム」の利用者は、午前中は高齢者、午後は主婦層、夜は仕事帰りの男性というように分かれており、中でも、毎日同じ時間帯に訪れて、同じトレーニングマシーンで、自分の体力に合わせたメニューをこなす高齢者の様子から、健康促進や自己管理に対する意識の高さを感じられた。

また、毎日顔を合わせる中で、お客様同士の仲間意識が強く、運動をするだけでなく、会話や人と人の繋がりを楽しみに訪れている方も多く、まさに、「健全な肉体は健全な精神や環境の基につくられる」場面を目の当たりにして、学校生活においても生徒たちを取り巻く環境や人間関係が明るく健全であれば、自然と健全な成長に繋がることを実感した。

また、いくつかの「健康に対する講座やセミナー」にも体験させてもらった中で、講師の方々話を聞き、お客様を引きつける話術や話の内容も、自分自身にとってプラスになった。

最後に担当した「フロント」は、お客様が温泉またはプールのどちらの利用なのかを聞き、そのロッカーキーを渡す入館受付と、お客様が返却したロッカーキーから下足キーを渡したり、もし、館内での飲食があった場合の精算をする退館の受付が主な仕事内容で、これまでと違い、お客様を待たすことなく、迅速に対応しなければならない点で一番苦労した。

しかし、老若男女問わず、実に多くのお客様と接することができたことで、穏やかに待ってくれる方、とても急いでいる方、機嫌の悪い方、愛想のよい方や悪い方、ロッカー番号にこだわりを持っている方、苦情を申し出る方などいろいろなお客様に対して臨機応変に対応出来るようになった。

また、大切なのは相手に係わらず、いつも真摯な態度で自分の感情よりも、お客様の気持ちを第一に考えて行動することであるということにも気づいた。

これは、何かと教師主導になりがちな学校現場で、生徒は当然のことであるが保護者の気持ちや考えも大切にしていかなければいけないということの再認識が出来た。

この1ヶ月間の「民間企業等派遣研修」は、職業体験としてではなく、「自らの教育観や指導感を見つめ直す」場として純粹に研修に取り組むことができた。

IV 今後の課題

この研修を終えて感じたことは、「余裕」を持つことの重要性である。決まった時間に「休憩」をしっかりとすることで心身ともにリフレッシュして労働の効率良く行う点では、教育現場でも見習う必要があると思う。しかし、学校現場は民間と違う「特別な職種」でもあるので一概に休憩をとればよいといっているのではなく、教職員がゆとりを持てるように職員の協力体制や組織作りに工夫をする必要があると思った。その上、行政からも何らかの手だてがあればもっとよいと思う。

研修を通して幼児・児童連れの父母を見てきたが、館内を走り回る我が子を注意せず、周りの年配の利用者が注意したことに対して逆に苦情を言う母親や、我が子を必要以上に叱る父親、祖母にすべてを任せて全く子供と関わろうとしない両親など、稀薄または過保護過ぎる親子関係などについて考えさせられた。

地域の人たちが、教師である自分に対して多くの労いや学校に対する意見・要望など多くの言葉をもらい、地元の学校に対しての期待が高いことがわかった。これからはそういう人たちの意見を生かして、地域と協力・連携した学校づくりも大切であると思った。